



令和三年『小松史談』寄稿原稿

大生院に残る辞世の句逍遙

大西 大寛

(新居浜市)

明治まで大生院は小松藩であった。三百年近くの間、善政を敷いた藩であったが、それを支えたのが、領内の名主、所謂庄屋であった。大生院の庄屋は代々高橋家で、元和六年、初代、高橋伊賀守正次という武将が帰農して、庄屋役を拝命して以来、明治四年任が解かれるまで二七〇年余庄屋役を勤めた。さて、大生院本村には、質素で慎ましい高橋家代々の墓碑が並んでいる。

そこに、三つの辞世の句があることは、これまで知られてこなかったが、この度高橋家と俳諧の深い縁を偲ぶことができた。寛政七年、小林一茶が、伊予を訪れた。寛政の紀行「旅しうゐ」には、讃岐から伊予を訪ね、その往復途上、宇摩郡入野の庄屋、中山家の暁雨館にて逗留、正月十日新居浜「騎龍亭」に泊まった。その後、西条大町の旅龍

屋に泊まり伊曽野神社へ詣で、新居浜にしばらく逗留、沢津の阿弥陀堂、田の上の「影香舎」に投宿して近隣の俳人と風交する、「長閑けしや雨後の繩張る庭雀」、「帳綴る加勢もせずに旅寝とは」などの句を残して、十五日には松山に至っている。

一茶が去って八年後、「予陽俳諧友千鳥」が発刊され、伊予二四〇名を収めた。その中に麦門こと大生院八代目、庄屋高橋喜平治のこの句も収められている。

ふか

「明月や鹿に頼せて夜もすがら」 麦門

さて、一茶が来た寛政七年と言えば、喜平治こと麦門が亡くなる前年であり、その句座に加わっていたであろうか。おそらく病床にあつて歯がゆい思いで遠来の宗匠の噂を聞いていたのではあるまいか。一茶の来遊の翌年、寛政八年八月十六日麦門は逝った。



す しきね
「春でに月志起寝の雲は晴にけり」麦門

を辞世句として墓石に残して。しみじみ味わってみると、「月と尽き」をかけ、「しきね」は数寝(寝床)と「数寝の船」、七福神の宝船の故事をも思い浮かべての、長く苦しい病床に臥せつていて、やっと布団を上げることができ、まるで、「しきね」のような雲が晴れるように苦痛からも解放され、晴々するだろう。その時がやっと来たという覚悟の一句であったのではないだろうか。ずいぶん昔、西条三本松に住んでいた十四代宗家高橋道義翁から句について仄聞したことによると、喜平治は江戸から高野山へ長い旅をしている、おそらく俳諧のメツカ江戸で蕉風にもふれ円座に加わっていたのではあるまいか。

この墓所には他に二つの辞世の句が彫られているが、幕末から明治にかけて、麦孫こど高橋正義の墓誌にも彼の功績と共に辞世が彫られている。水不足に悩む村のため渦井川二番堰を私財を投じていたとも書かれている。また驚くべきは、その墓誌には、風流を好み京河鰯に召され京家となさしめたと書かれている。三条と言えば、かの「七卿

落ち」の尊王・公家の一人でもあつた三条実美公であつたのではないだろうか。小松藩とも浅からぬ関係があり、京で修行中であつただろう田岡俊三郎ら篤山門下の同朋が少なからず影響があつていたものと考えても不思議ではない、彼が風雲急を告げる京都でどのような使命を帯びていたのかわからないが、謎は深まるばかりである。彼の辞世の句は「麦孫」と号して彫られていて、明らかに祖父の「麦門」からして文字通り喜兵次の孫ということか。ユーモアに富んだ人であつたらしい。彼の辞世句は、

墓誌「正義性大膽謹直 年十五務庄屋職 里人懐之 又富公共心 投私財

築渦井川二番堰

京河鰯公被召

被為京家

又好風流

號麦孫

有辞世」

「いつまでも遊びたき野を日のくるる」麦孫



いつまでも遊びたき野とは、激しい世の流れなのか。駆け巡る思いを懐かしむように、明治二十三年二月、七十六年の波乱に富んだ春秋を終えた。明治の世になって庄屋を解かれた高橋家だが十二代高橋重義こと東指、この人は、喜兵治、大助からの影響を受け継ぎ真剣に俳諧と向き合った人でもある。明治初期、庄屋職を解かれ自活の道に四苦八苦しなから、俳句の道を進んでゆくことになったらしい。新居浜でも二名舎が創設され、子規が俳句革新運動をおこし、新聞「日本」に新傾向を唱えつつあるとき、結社されたその主宰は泉川村、二名庵主 鳳棲、大生院不尽庵 東指こと高橋重義もいた。昭和三十七年発行の新居浜市誌には東指の記載があり、それによると、彼は大生院、最後の庄屋高橋玄吾の長男として慶応元年に生まれた。父玄吾も旅先で円座に加わり、

「誰もかもなりたきものは客の月」玄吾

と即興を吐くほどの人であつたらしい。東指の母も「お前の言葉はそのまま句になる」と幼時から天稟の才が萌していた。明治十二年西条 西福寺で奉納句一万余句の中で巻頭に選ばれた少年東指の句に

「十六夜の闇まき上くる簾かな」東指

があつた。成長した東指は明治十六年新居浜北野の尾崎山人塾に入り漢学を習得し、郷土の大生院役場に勤務した。三〇歳にして、京「梅の本」五代から俳諧宗匠を許され、立机(結社の創設)俳道と村政に精進した。いよいよ明治二十五年、大生院二十一番戸に「山水社」を創設、同時に発刊された「光風新誌」を隔月出版の俳誌を全国から投句を募り俳句同人誌を発行した。これには大変な労力と時間を要したものと思われるが、彼の人生をかけた大事業であつたものと句誌を目の当たりにして想像する。時あたかも、子規とほぼ同世代で子規のほうは、一足早く「病床六尺」を書いて、あの「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」の辞世句を残し、明治三五年に僅か三十四歳で壮絶な死を遂げた。おそらく東指も同郷にあつて子規の活躍を固唾をのんで見守っていたらうか。そういう東指も子規の後を追うように翌年、若干三十七歳で逝去した。この時の辞世句がこれである。

「桐一葉落ちて明るき机かな」東指

桐一葉は、烈日の暑さの中で青桐の葉がポトリと落ちるのを見て、秋を悟る。この措辞の基になっている、丁度このころ、坪内逍遙の「桐一葉」が出版され、演劇でもはやさされていたころ。一躍この「桐一葉落ちて天下の秋を知る」が人口に膾炙されるに至ったことを思うと桐一葉でなくてはならなかったであろう。現実には病床で、庭の木の葉が落ちて、急に机が明るく感じたのではないか。祖父である喜兵治の句の「晴れ」と「明るい」が絶妙に呼応して自らの死とどう向き合ったのであろうか。いずれも庄屋高橋家の俳諧に対する気概を感じる。他に

「散ることを忘れていたり百日紅」

「雨一日花見る心静かなり」 東指

郷土に残された辞世の句が長い時間を経て再び蘇り、語りかけるものは、尊く重い。



小松藩の一寒村でありながら、篤山先生の薫陶や俳人でもあった映門、菊女の映門派との結びつきは、いかなるものだろうか。俳諧のみならず、人々の豊かな結びつきとなり、それぞれの人生模様が垣間見えた。消えかけた碑の文字に四苦八苦しながらやっと紹介させて頂くことができたことを有難く思う。

「消えかけた文字蘇る冬の山」 大寛

